

安曇野拾ヶ堰の形成過程と維持管理に関する研究

平成 30 年 2 月 石見 佳苗

要旨

目的

松本市の一部と安曇野市を通る、長野県内でも最大の横堰である拾ヶ堰は、開削から 200 年が経つ現在も、灌漑用水路として安曇平野の水田を潤している。また、平成 28 (2016) 年度には世界かんがい施設遺産に登録された。拾ヶ堰を対象として、堰の形成過程と維持管理について分析・評価し、文化的景観としての価値と課題を明らかにすることを目的とする。

方法

文献資料の調査、拾ヶ堰周辺の現地調査、長野県および安曇野市でのヒアリング調査、土地改良区でのヒアリング調査などを通して、拾ヶ堰の形成過程と維持管理を調べる。また、国内外の評価や景観に関する取り組みや課題についてまとめ、拾ヶ堰の現在の課題や文化的景観としての評価について考察する。

結論

開削は文化 13 (1816) 年である。安曇野の地質は水が染み込みやすく、農地が少ない中、中島輪兵衛らによる奈良井川取水の用水路が計画された。土質対策、梓川の横堀水路、緩勾配で広範囲な計画、大小用水路との立体交差など、農民自らの手で技術的困難を克服し、わずか 3 か月で完成させたことが分かった。これにより農業生産性は飛躍的に向上し、現在も地域の基幹用水路として灌漑用水を供給している。延長は約 15km である。開削されてから 200 年が経ち、国営事業を始めとした度重なる改修事業により、鉄筋コンクリート 3 面張りになった他、排水や防災といった新しい機能も加わり、今日では観光地の優良な景観を形成する役割も果たしている。行政も農業だけでなく地域の重要な財産として維持管理や景観保護に取り組むことが明らかになった。課題としては近年農家件数の減少や農地の転用による灌漑面積の減少など、将来的には地域住民の人口減少による拾ヶ堰の衰退が考えられる。

指導教員 藤居 良夫 准教授